

博士学位論文要約

論文題目：トルコは如何にしてムスリム・ディアスポラを受け入れたか
—ウイグル亡命者の軌跡をたどる—

氏名：中屋 昌子

要約：

アジアとヨーロッパが交差するトルコ最大の都市イスタンブルは、中国から移り住んだ多くのウイグルが暮らす街である。そのイスタンブルに、改革開放後、宗教の自由を求めて亡命してくるウイグルが後をたたない。敬虔なムスリムであるがゆえに、祖国からの離散を余儀なくされた人たちが目指すトルコは、ウイグルのもうひとつの「故郷」として求心力を高めている。新疆ウイグル自治区(以下、新疆)で高まったイスラム復興が、ウイグルの新疆からの離散を通じて、トルコのウイグル社会にまで達しているのである。そして、それは、トルコのイスラム復興とも連動することによって、ウイグルの宗教的なディアスポラ・コミュニティを形成し拡大させている。そのコミュニティはウイグルをはじめ、トルコ人やトルコの関係諸機関のネットワークに支えられ、重層的な広がりを見せている。

ウイグルのイスラム復興に関する先行研究は、その多くが、新疆に限定されたイスラム復興を対象としたものである。そして、イスラム復興を管理・統制しようとする中国の宗教政策を通史的に扱ったものが主流である。国境を越えた枠組みでのイスラム復興の先行研究は、一部では行われているものの、サウジアラビアなどの外国から新疆へ流入して来るものを捉えた分析に留まっている。一方、ウイグル・ディアスポラを対象とした先行研究では、テュルク民族主義者として代表される歴史上の人物や、世俗的な観点から世界ウイグル会議とそれに連なるウイグル・ディアスポラの民族主義系 NGO 組織の活動に焦点を当てたものが主流となっている。新疆から離散しトルコに信仰の自由を求め亡命するウイグル・ディアスポラの急増が社会現象となっているにもかかわらず、こうした現象に焦点を当てた研究は、ウイグルのイスラム復興研究、ディアスポラ研究において空白領域となっている。

本研究の進めるウイグルの宗教的なディアスポラ研究は、単にこれまでの移動に焦点をあてた移民の概念や、労働力のために移動する人々の概念に収まるものではない。ウイグルの離散は自発的なものではなく、故郷を離れざるを得なかったトラウマ的な理由を伴って離散していることに焦点を当てている。このような対象には、人そのものに焦点を当てるディアスポラの枠組による分析が有効である。

本研究の目的は、トルコのウイグル・ディアスポラのうち、主に改革開放後に新疆から離散を余儀なくされたウイグルの宗教的なディアスポラに焦点を当て、①ウイグルの離散に至った経緯と背景、②離散の形態、③離散先トルコにおける信仰形態の特徴について明らかにすることである。トルコのウイグル・ディアスポラのイスラム信仰の形態が一様なものではないことを踏まえ、本研究では、ウイグルのイスラム信仰の形態を主に①イスラ

ムの教義を厳格に実践するサラフィー、②ウイグル民族主義者からトルコでイスラムに覚醒したサラフィー、③ウイグルの伝統的イスラムであるスーフィー(神秘主義者)、の計3つの信仰形態に分類し、それぞれ対象者に聞き取り調査を行って、トルコにおけるウイグルの宗教的ディアスポラの信仰形態を構造的に把握した。そして、トルコにおけるウイグルの宗教的ディアスポラのコミュニティにおいて、NGOの活動の実態調査をとおしてトルコの信仰形態の特徴について明らかにした。

本研究の各章の結果は以下のとおりである。

第1章では、ウイグルの故郷である新疆が中国共産党政権に組み込まれてから改革開放に至るまでの宗教統制に関する歴史的経緯を明らかにした。中国建国当時(1949年から1957年)は、中国共産党と現地ムスリムとのあいだで宥和政策がとっていたこと、しかし社会主義化の動きが急進的になると(1958年から1965年)、ワクフ制度の解体やマドラサ(神学校)の閉鎖などが進められ、イスラムを支柱とした社会が次第に解体されていったこと、文化大革命から改革開放(1966年から1978年)までは、法的に信仰が禁止されていたわけではないが、文化大革命自体が、超法規的なイデオロギー闘争であったために、信仰そのものが激しい糾弾の対象となったことなどについて確認した。同時に、その過酷な状況のもとでウイグルが地下活動によって信仰実践が続けられていたことを明らかにした。

第2章では、新疆のイスラム復興と宗教統制の現状について明らかにした。すなわち、改革開放以降、信仰の自由が認められ、イスラム復興が進んでいるが、その一方で、女性のニカーブ規制、子どもの宗教活動禁止など厳格な宗教統制が進んでいることを指摘した。そうした宗教統制は法を根拠にしたものであることを指摘し、その背景には信仰の自由は認めつつも宗教を消滅させるために働きかけを行うというマルクス主義の宗教理論が存在することを明らかにした。それによって、新疆の宗教統制とイスラム復興の構造的特質が明らかとなった。

第3章から第5章では、サラフィーと元民族主義者のサラフィー、そしてスーフィーのそれぞれについて、具体的な人物の経験をもとに、離散の経緯と背景、離散の形態を探った。

まず、第3章では、サラフィーに焦点を当て、中国で信仰とともに生活をいとなむことが困難であったことや、2009年7月5日ウラムチ事件の前後にウイグルとしてもムスリムとしても過酷な状況にさらされたことで、新疆から離散しトルコに亡命する決意に至ったことを明らかにした。2009年7月5日ウラムチ事件以降、信仰の自由を求めてトルコに亡命する人たちの急増が社会現象となっているが、同事件が発生した際にトルコ政府がウイグルに同情を示したことが背景にあることを指摘した。そして、前述のサラフィーがパスポートを所持せず東南アジアを経てトルコに亡命した経路や当時の状況について聞き取り調査をもとに検証した。

第4章では、もともと新疆では民族主義者であったが、トルコでイスラム覚醒しサラフィーとなったウイグルに焦点を当てた。トルコに亡命後、トルコやウイグルの民族主義者との交流によって民族主義に失望し、次第にイスラムに傾倒していったことを明らかにした。また、現在行っている亡命ウイグルへの支援活動を始めることになった背景には、トルコへの亡命途中で家族と生き別れとなったウイグルたちから支援の要望があったこと、

そしてその支援の協力者に宗教的關係者であるトルコ人の存在があったことについて明らかにした。

第5章では、伝統的スーフィーを保持し続けているウイグルに焦点を当てた。改革開放前の新疆では、ムスリム社会の解体によって信仰の実践を自粛せざるを得なくなっていたことや、信仰の自由を求めて改革開放後に新疆を離れた経緯、亡命先のトルコに定住するまで流浪したサウディアラビアやヨルダンなどでの宗教実践の様子について聞き取り調査を行い、スーフィー特有の信仰体系と思考について考察した。

第6章では、第4章で示したウイグルへの支援活動のために設立したNGO(世界被抑圧者と難民協会)に焦点を当て、協会設立に至った経緯を明らかにしたあと、協会が行っているウイグルへの身分保障や教育支援、医療支援の請願、そしてトルコ赤新月社をはじめとするトルコ諸機関からの援助、およびウイグル商人、トルコ商人からの支援活動の詳細について明らかにした。こうした支援によってウイグル・ディアスポラの宗教的なコミュニティが形成され、拡大していることを指摘した。そして、そのもとでウイグルやトルコ人がテュルク民族としてより、互いにムスリムとしてのシンパシーを有していることを明らかにした。

トルコにおけるウイグルの宗教的なディアスポラは、トルコにおけるイスラム復興と連動し、イスラム共同体の一員として受け入れられている。本研究では、こうしたイスラム共同体のなかでは、イスラム教義体系に内包されている慈善活動が自ずと運用され活発化し始めることを明らかにした。ムスリムの自発的な慈善行為によるものであるから、慈善活動はより活発化し、ムスリム同士の関係は強固なものになっている。それがイスラム共同体における共存の原理となっていることを確認した。結局のところ、テュルクやウイグルという民族の概念は人為的に作られたものであって、それが社会の公正をもたらす、もしくは共存のネットワークを創出するということには、つながらない。それゆえ、ムスリムとしてのつながりを強固なものにしているのである。それは、まさにウイグルがムスリムとして新疆で創出したかったムスリム共同体なのであったということを明らかにした。

本論文では、このようにトルコにおけるウイグル・ディアスポラを主にウイグル側からの視点から検討した。今後は、受け入れ国であるトルコやトルコ人の視点、特に離散した人々を受け入れる文化的・経済的環境について具体的に考察するために、トルコのムスリム商人を主体としたイスラム復興について別途詳しく検討する必要がある。また、ウイグルの宗教的なディアスポラについての比較検討をするために、トルコに亡命した同じテュルク民族、すなわち冷戦崩壊後に急増した中央アジアのテュルク系ムスリムのディアスポラの実証研究を進めていくことが必要となる。